

甲 第 号

岡田 光司 学位請求論文

# 審 査 要 旨

奈 良 県 立 医 科 大 学

## 論文審査の要旨及び担当者

報告番号	甲第	号	氏名	岡田 光司
論文審査担当者	委員長		教授	坪井 昭夫
	副委員長		教授	山下 勝幸
	委員		教授	飯田 順三
	委員		准教授	安野 史彦
	委員		教授	岸本 年史
	(指導教員)			

### 主論文

Lower prefrontal activity in adults with obsessive-compulsive disorder  
as measured by near-infrared spectroscopy

近赤外線スペクトロスコピーで測定された成人強迫性障害における前頭前野  
の活動性の低下

Koji Okada, Toyosaku Ota, Junzo Iida, Naoko Kishimoto,

Toshifumi Kishimoto

Progress in Neuro-Psychopharmacology and Biological

Psychiatry 第43巻 7-13頁

2013年6月発行

## 論文審査の要旨

強迫性障害は、繰り返される煩わしい考えや行為が反復的に出現する慢性な不安障害であり、社会適応に問題を有することが多い。また、強迫性障害の生涯有病率は2～3%と決して少なくなく、しかも難治性の疾患であり、その病態生理はいまだ不明なことが多い。一方、赤外線スペクトロスコピー（NIRS）技術の発達により、非侵襲的に、精神疾患に関する神経機構を解析することが可能となってきた。しかしながら、成人の強迫性障害の前頭前野について、NIRSを用いた解析はこれまで報告されていない。

そこで申請者は、12名の強迫性障害患者と12名の健常者に対して、前頭葉機能に関連した”Stroop課題“という言語表現にかかわる課題を遂行している際の前頭前野における血流変化（酸素化ヘモグロビン変化）を、24チャンネルのNIRS計測装置を用いて測定した。そして、強迫性障害患者と健常者の前頭前野での各チャンネルにおける血流変化を比較検討した。その結果、NIRSにより成人期の強迫性障害では、左外側前頭前野領域における血流変化が有意に低下していることを初めて明らかにした。

本研究は、左外側前頭前野の神経活動の低下が、強迫性障害の病態生理に影響を与えている可能性を示唆しており、また、NIRSにより、強迫性障害の診断や治療方針の決定などに貢献し得ることを示すものであり、有意義な研究と評価される。

## 参 考 論 文

1. Brain structural changes and neuropsychological impairments in male polydipsic schizophrenia

Tomohisa Nagashima, Makoto Inoue, Soichiro Kitamura, Kuniaki

Kiuchi, Jun Kosaka, Koji Okada, Naoko Kishimoto, Toshiaki

Taoka, Kimihiko Kichikawa, Toshifumi Kishimoto

BMC Psychiatry 12 : 210, 2012

以上、主論文に報告された研究成績は、参考論文とともに精神医学・行動神経科学の進歩に寄与するところが大きいと認める。

平成 25 年 5 月 14 日

学位審査委員長

脳神経システム医科学

教 授 坪井 昭夫

学位審査副委員長

神経情報伝達学

教 授 山下 勝幸

学位審査委員

精神医学行動神経科学

教 授 飯田 順三

学位審査委員

精神医学行動神経科学

准教授 安野 史彦

学位審査委員（指導教員）

精神医学行動神経科学

教 授 岸本 年史